

地球の

なかまたち

たまごがない！

photo by toyoosa



「たいへんだ！ たいへんだ！」

ネズミフグのミグがさわいでいます。

「なにがあったの？」

「どうしたの？」

ミグのなかまのメグとマグがそばへ寄ってきました。

「たいへんなんだ！ ペンギンのギンコさんの子供がゆうかいされた！」

「ギンコさんに子供がいたかしら・・・」

メグが頭をかしげました。

「まだタマゴじゃないか？」

マグもふしぎそうな顔をしています。

「タマゴだってなんだって 子供にはちがないだろう！」

ミグは怒った口調で言いました。

「そうね」とメグが答えます。

「いずれタマゴから小さなペンギンになるね」

マグものんびりした口調でうなずいています。



「それより ギンコさんの子のことだ！」

ミグはいらいらしてきました。

「そうそう。ギンコさんの子供ね」とメグがいうと

「そうそう。子供がどうしたって？」とマグが聞きます。

「さらわれたんだ！」ミグが息を切らしながら教えました。

「さらわれた！」

「さらわれた？ だれに？」

メグとマグは声を合わせてさげびました。

ミグはカッカとしてきました。

「それがわからないから たいへんなんじゃないか」

「そうだね」

「うんうん。そうだね」

「ギンコさんはとても悲しんでるんだ。なんとかしなきゃ」

ミグはこうふんしています。



「とりあえず みんなにきいてみよう」

ミグたちは まずオットセイのオットトに聞きました。

「ギンコさんの子がゆうかいされたんですが 何か知りませんか？」

オットトは低い声でうなりました。

「私がゆうかいしたとでも言うのかね？」

「いえいえ。 そういうわけじゃないんですが」

オットトは大きなしっぽで水面をたたきました。

ミグたちはオットトのおこした波で流されそうになりました。

「知りませんかって聞いただけなのに」

ミグは半分ベソをかいています。

「きげんが悪かったんだよ」

メグとマグはミグをなぐさめました。



ミグとメグとマグは気を取りなおしてラッコの所へ行くことにしました。

ラッコのララはちょうど食事中でした。

「何か用？」

ララも大事な食事をじゃまされてふきげんそうです。

「ギンコさんの子がゆうかいされたらしいんですが」

ミグはおずおずと言いました。

「ギンコさんの子？」 ララが聞きかえします。

「ギンコさんに子供なんていたかしら」

「まだタマゴなんですけど」

「私はペンギンのタマゴなんて食べませんよ。貝がスキなんですから」

そういうと、ララは貝をおなかの上でわって食べ始めました。



ミグたちは、しかたなくフサギンのサボに聞きました。

「ギンコさんのタマゴ・・・」

はなしをする前に、サボは答えました。

「タマゴがなくなったんだってね。 聞ってるよ。

ぼくのこの家には、ギンコさんのタマゴは入らないよ。

うそだと思うならみてみればいいよ」

だれに聞いても、みんなうたがわれたと思って、ふゆかいそうです。

「うたがってるわけじゃないのに・・・」

ミグは悲しくなりました。

「ゆukai、ゆukaiって言うけど、タマゴがなくなっただけじゃないか」

サボはミグたちをにらみつけました。



「あんたたち、探偵のまねでもしているの？」

声の主は海がめのウメでした。

「だって ギンコさんがかわいそうなもの」

と、ミグは答えました。

「自分の大事なタマゴだもの、ギンコさんは自分でさがしますよ」

ウメは手足をパタパタさせました。

「あまりおせっかいをやくもんじゃないのよ」

「ぼくたちはおせっかいなのかなあ」

ミグたちは顔を見合わせました。

少しさわぎすぎたかもしれないと、ミグたちは反省しました。



「さがしてあげるのは悪いことじゃないさ」

そう言ってくれたのは ウツボのボーです。

いつもはきらわれ者のボーですが

たまにはいいことも言うのです。

「ありがとう、ボー。 ギンコさんだって、ひとりでさがすの大変なものね」

ミグはほっとしました。

「ぼくも一緒にさがしてあげよう。みんなでさがせば見つかるかもしれない」

ボーはゆらゆらと泳いでいきました。

「ボーにもいいところあるね」

メグとマグはうなずきあいました。





「あっ、タマゴ！」

ミグがさげび声をあげました。

「タマゴ？」

「タマゴだって？」

メグとマグが振り返ると、

セイウチのウッチーがタマゴのようなものを持っています。

「タマゴじゃないわよ！」

ウッチーはおどろいた顔をしています。

「これはわたしのボールよ」

よく見ればそのとおりでした。

ウッチーの持っていたのは黄色いまんまるのボールでした。

「ごめんね。まちがえちゃった」

ミグはしょんぼりしました。

「気にしないでいいわよ。それよりギンコさんのタマゴがなくなったんですって？」

「そうなの。ぼくたちがさがしているんだけど、みつからないの」



その時「おーい」と呼ぶ声がしました。

「おーい。ミグ」

イルカのルカでした。

「ルカじゃないか。 どうしたの？」

「君たちをさがしていたんだよ」

「ぼくたちを？」

「タマゴが見つかったよ」

ルカが息を切らして言いました。

「見つかったの？」

「見つかったんだって？」

「どこで？」

ミグたちは一斉に声をあげました。

「ぼくについておいでよ。ギンコさんも待ってるよ」

ルカの後にみんなぞろぞろとついていきました。



ギンコさんは大事そうにタマゴをかかえていました。

時々、タマゴをのぞいています。

ちゃんとタマゴがあるかどうか心配なのでしょう。

「よかったね。タマゴがみつかって」

ミグがほっとしたように言いました。

「どこでみつかったの？」

ミグとメグとマグは声をそろえて聞きました。

ギンコさんは、はずかしそうに下を向いています。

かわりにルカが答えました。

「あのね、ギンコさんが食べ物をさがしにタマゴのそばをはなれて・・・」

「はなれて？」ミグたちはルカの次のことばを待っています。

「帰ってきたとき、タマゴのある場所をまちがえたらしいんだ」

「場所をまちがえたって？」

ミグたちはぽかんと口をあけました。

「そう。つまりタマゴはずっとそこにあった、というわけさ」

ミグとメグとマグは口をあけたまましばらく動けませんでした。

おわり